

公開講演

## 『法華経』の精神

只今、御紹介頂きました大正大学の塩入でございます。過去三年間、仏教学部長などという役職についておりまして、まとまった研究もちょっとできないでおったような関係で、果たして期待して頂くようなお話ができるかどうか疑問でございますが、平生『法華経』を読み、中国の仏教あるいは日本の仏教、天台教義が中心であります。仏教全体の流れとどうか、展開とどうかをみつめたうちに感じた事なども含めまして、あるいは学問的には少々一方的な面もあるかと思いますが、『法華経』は何を言おうとおるのか、『法華経』の目ざしているものは何かといった点についてお話してみようと思えます。

『法華経』と申しますと、只今の光地仏教学部長先生のお話のように、『観音経』だとか、『如来寿量品偈』など曹洞宗の方々でも随分読んでおられますし、日本仏教の多くの宗派で親しまれているお経が含まれている経典であることは、今

## 塩入良道

更申し上げるまでもないわけでございます。ところが一般の方々には法華経というと日蓮宗だけのお経、さらにある特定の信仰の独占物の如くみられる面がございます。何か狂信的な経典であるが如く誤解されている点もございます。これはまあ、本当か嘘かわかりませんが、人に聞いた話ですが、浄土真宗の盛んな安芸門徒とか三河門徒、あるいは北陸門徒などでは、「南無妙法蓮華経」を唱える日蓮宗の檀徒と、それから本願寺さんの「南無阿弥陀仏」を専称する門徒は、結婚すら現実問題として、できなかったというような話も残っているくらいで、法華経と浄土信仰、あるいは「南無妙法蓮華経」と「南無阿弥陀仏」というのは、もう両極端のように考えられているのが世間一般のようでございます。

### 日本文化と法華経

さて、それはそれとして、日本仏教、とくに中世・近世ま

での仏教において、法華経が日本仏教に及ぼした影響は、はかり知れないものがありまして、これは皆様もある程度おき及んでおると思いますし、道元禅師の『正法眼蔵』には法華経の引用は多く、とくに「法華転法華」という一條さえ設けておることはよく御存知のことと存じます。道元禅師の法華経観については、あとで述べますが、とにかく日本仏教と法華経は切り離すことはできません。

法華経という経典は非常に日本仏教においてよく読まれており、日本文化に与えた影響は、最も顕著なものがあつたというところが在来言われておりますし、また種々研究されておるわけでございます。皆さん御存知かどうか、今の西本願寺の法主の養育係になられた島地大等という、浄土真宗の方ですが、天台学の大家がおられました。『天台教学史』ははじめ『日本仏教史』とか、『仏教綱要』など不朽の書が残っておりますが、法華経についても、原漢文と和訳及び科文を傍注とした書物がありまして、その附録に釈教歌、特に法華経について歌われた和歌を何頁かにわたって挙げております。その数がですね、要するにその内容からみて明らかに法華だとわかるものは別として、法華を詠んだと題のあるものだけを載せておりますが、例えば二十八品のそれぞれを詠んだとか、あるいは経文のこれこれの用語を詠んだとか、題が明記してあるものだけで何と千三百六十種にのぼっています。た

だ残念なことですが、どれとどれと、どういう歌集から、何百のうちから取ったのか、という事がちょっと現在のところ調べがつきませんので、これだけではまあ、何とも言えませんが、とにかく圧倒的に多いことには変わりありません。

また立正大学の高木先生が「法華経和歌と法門歌」という論文の中にですね、これはある程度和歌集をほとんど網羅しています、これもその和歌がいくつあつたか、という事は書いてございませんのでちょっと不十分ですが、要するに「法華経歌」と称して千四百五十七首を時代別に分類しまして、平安期二十二%、鎌倉期三十五%、室町期二十三%、江戸期十七%弱、とそういう統計を出しておるんですね。

明治末年に編纂された仏教辞典として定評のある『織田仏教辞典』を見ますと、「歌題」という分類がなされており、非常に長い熟語が載っております。織田得能さんは、明治の末において『国文学における仏教の影響』という釈教歌を中心とした小冊子を出した事がありますが、非常に国文学において法華経を扱っているものが多い。そして織田得能さんの辞典によると、大体、平安から鎌倉ぐらい、初期ぐらいまでのものが非常に多く使っておるようです。

ところで私共もそういうものを見たりしておりましたので、平安朝が一番法華経に対する和歌が多いかと、そう見えておったわけですが、高木先生の統計を見てびっくりしたわけ

です。平安期二十二%に対して、鎌倉三十五%。非常に多いわけです。それで、平安時代には現在ののように仏教というものが、そう各宗、各派というように、もちろん檀信徒もふくめまして、固定した教団形態をもっていなかったわけです。要するに仏教であればよかつたという面があったわけであります。ところが鎌倉仏教がおこつて、それぞれの信仰に基づく教団が生れたと一般にいわれるのですが、法華経を詠んだ和歌が平安期よりも鎌倉時代の方が圧倒的に多いということに興味深いことでもあります。

これも、こちらの大学に関係がありましたかどうか、間中富士子さんという鶴見女子大学の先生をしている方の話ですが、『源氏物語』に、「雨夜の品定め」、女性の品定めを行うところに、そのやり方に、後で申し上げますが法華経の法説周・譬説周・因縁周の三周説法、今流に言うならば一般論あるいは原則論、つぎに喩譬、たとえばによる論評、それから経験論、体験論、そういうものでしたという事を言っております。

それから、これは有名な話ですが、例の『枕草子』にある話です。清少納言がですね、ある時法華経の講經、今で言えば法要をともなった講演会とでもいいでしょうか、その講座の席へ行ったところが、女流作家で昔でも忙しかったと見えまして途中でどうしても帰らなきゃならん。そして帰ろうと

いたしますと、ある公家さんがですね、「もうお帰りですか、講義はまだ終わっていませんよ」と皮肉を言ったところが、「あなたこそ五千起去におなりあそばすな」と言ったと。これは後で出て来ますが、法華経が説かれます時に、いかなる大乘經典でも、非常に奇端が起こります。六種に地が震動するとか、あるいは天から曼陀羅華が雨降るとか、そういう後で釈尊が三回、舍利弗に御説法して下さいと問われて「止みなん」、「だめだ、だめだ」、今説いてもお前達にはとつてもビククリしちゃつてわからん。かえつてこういう事を説くと、かえつて仏教でないと思つてしまふだろう。そして四回目に舍利弗が懇願して、やつと説き始める。そうして説き始めようとすると、五千人の増上慢の声聞、声聞については皆さん御存知でしょうけれど、これが法華経の会座から立ち去つてしまった、とこういう故事があるわけですよ。

そういう平安貴族、文化人の日常の会話にそのような法華経の物語がぱつと出るといふ事は、いかに法華経というものが、当時の本当の信仰かどうかは一応措いてですね、文化・教養の中に深くはびこつておつたかがわかると思います。こんな例は多数ありまして、先程申した織田得能先生の『織田仏教辞典』を見ますと、歌題と分類わけした長い句がたくさんありまして、勿論法華経だけではなく、禪の公案の句や浄土經典の句などもあります。たとえば「於未來世咸得成

仏」(授記品)、「於無量國中乃至名字不可得」(安樂行品)など、私共見ても、さてなこの句は何品にあったかな、というような句に、それを歌題とした和歌を配しています。

それほどに当時の文化人は、法華経というものの信仰が一つの教養にまで見られておったわけですね。これはまあ、比叡山の仏教が法華経を中心として、多くの大乘経典を依り処として法華経を中心とした円、禅、戒、密という仏教でありましたので、そういった比叡山の仏教が当時非常に、良い意味でも悪い意味でも、大変な権力がございましたから、当然文化人に浸透した事は間違いないわけですが、さきほどの法華経の和歌が鎌倉期により多いというように、日本文化と法華経は切り離せないものでありました。

### 法華経と浄土信仰

これについては、まだまだ用例がたくさんありますけれど、一言だけ申しますと、先年私は、岩波思想体系の往生伝と法華経験記というものが一冊になった本の刊行にあたって、井上光貞先生の仏教の方の註のお手伝いをしておりまして、大変感激したわけですけど、当時の『極楽往生伝』というのは大体、西方浄土、希に兜率往生の話も出てきますけれど、極楽浄土に往生した、という伝記がほとんどであります。

そして、そこに『大日本法華経験記』という法華経の信仰をした方々の伝記が一つ、往生伝が数種あるわけです。この中にですね、これは全部で百二十九例扱っておりますけれど、その人達は、全部法華経の信者、あるいは法華経を読んだ人、あるいは法華経そのものでなくして、法華懺法の行をした人とかいろいろありますけれど、その中で四十六人が西方極楽浄土に往生した、という記述があるんです。要するに法華経を読誦したり、法華経の信仰をもって、西方浄土へ往生する事が、少くとも平安末期、鎌倉初期までにおいては一般の人々はちっとも不思議ではなかったようです。

このことは現在の日本の仏教の法華経と浄土経典、「南無妙法蓮華経」と「南無阿弥陀仏」という対比から考えてですね、ある人に言わせれば、宗教的に純粹でないという見解も多いのでありますが。これについては有名な言葉で「朝題目に夕念仏」という言葉がありますね。これは比叡山で朝は『法華懺法』というものを中心に勤行をしている。夕方は『例時作法』といって、阿弥陀経を読むのを中心とする勤行するところから出たわけですが、その「朝題目に夕念仏」とは、また逆の意味もありまして、朝題目して夕方に念仏するというのは、無定見すなわちちっとも首尾一貫してないという悪い意味でも使うわけです。そういう意味もあるかもしれませんが、私は別の意味において日本人の宗

教的情操と申しますか、日本人の宗教的意識にはそういった夾雑性と申しますか、一元的思考でいかないものも多くあったんじゃないかと思えます。

現在もこれはまあ、皆さんよく御体験なさると思えますけれど、クリスチャンの方でもですね、特にプロテスタントの方が多いのですが、お寺に参拝しますし、知人の葬儀には仏教的御焼香もいたします。そして私事ですが、自坊で正月お護摩をたきます。その護摩札をクリスチャンの方がお受けしております。そういう方が大変多いわけですが、そういった日本人の宗教意識といえますか、宗教的情操があつて、いわば多元的思考が無意識のうちにあるわけです。これは良いとか悪いとか、あるいはどっちが優れて、どっちが劣れるとか、そういう事は別問題としてですね、日本人の昔から現在に至るまでの宗教なのであります。

ちょっと余談になりましたけれど、それからいわゆる一番古い往生伝、それは慶滋保胤の『日本往生極楽記』では四十人出してあります往生した方のうち、十人が法華経を読んだり、法華信仰をもった方です。これ約四分の一ですね、それからこれに続きまして、三善為康の『拾遺往生伝』というのは九十四人のうち三十六人と、それからそれを追加した『後拾遺往生伝』では、百四十二人中二十七人と、これはまあ、ちょっと減りますけれど。まあ、このようにですね、当

時の日本の仏教の信仰者、あるいは教養的に仏教を受け取っておる方々においても、法華経の信仰や修行、さらに儀礼にふくまれた法華経精神と、西方浄土、あるいは兜率往生というものがちっとも矛盾なく融合しておったという事が言えるわけです。このように日本の文化において『法華経』というものが非常にポピュラー化しており、文化に与えた影響は大変なものであったわけであります。

### 道元禅師の法華経

皆さんは道元禅師の教えを学び、それを体得されようと勉強しておられる方が多いわけですから、禅の無執着の立場から、現代流の言葉でいうと一元的思考の持ち主ではないという事は重々知っておりますし、一般の方々ほど『法華経』についての常識が無いという事はありませんと思えますが、やはり所依の經典や宗旨の精神が、多少異つており、法華経に親しむ機会なり、知識については日蓮宗や天台宗の学生よりは少いかと、そう思ひまして実は「法華経の精神」というような題をつけたわけでございます。しかしながら、本日申し上げようとする「法華経の精神」ということは、どちらかというと、一般になされていような法華経の解釈や經典を通じての話でなく、法華経の目ざすものは何か、といったような、あるいは少しこれは口はばった表現ですが、「日本仏

教のルート」といった面から申し上げたいと思うわけでございます。先ほども光地先生のお話にありましたように、道元禪師は、鎌倉仏教の中で日蓮さんを除いては、仏教において一番『法華経』を使われた、という事はもう学会の定説であるのは、皆さん良く御存知の事だと思えます。私も今度そういう事があるという事は知っていたんですが、道元禪師の法華経観というようなものに接して、これは慚愧に堪えないような気持なんです。始めて『正法眼蔵』の「法華転法華」という項を拝読させて頂きまして、大変びっくりしたわけです。私が「法華経の精神」と題しまして、題をこちらへお届けした、その時に喋ろうと思っていたぎりぎりのところと非常に一致しておるといふ事に気がつきまして、大変びっくりしたような次第でございます。そういう意味で、今後皆さん方と共に道元禪師の法華経の身に体し方といったものを共に研究したいと思っておりますが、実に「法華経のルート」といったものを、実的に的確に把握しておられるんですね。もちろん私なぞよりも修行も学問も優れていた、それは当然でございますが、実に私は今回の講演を契機といたしまして、実にまあ感激と申しますか、仏法の有難さと申しますか、仏教には各宗派に分かれた教団が現在の日本仏教ですが、そのなかで仏教という総合面というか一致点というか、それが当然とは申しながら、天台の法華と道元禪師の法華が一致したとい

うことに、身にしみて感ぜられるような次第でございます。この「法華転法華」につきましては、短いものですからもう皆さん御存知の事かと思えますけれど、駒沢大学に関係のない方も多少お見えになっておると思えますので、その要点を御紹介いたしますと、大唐国の曹溪山宝林寺の大鑑禪師、六祖慧能禪師だそうでございますが、その会下に法達というお坊さんがいました。そして自分から称するのには、自分は法華経を誦する事、既に三千部だと、三千回も誦したんだと。そうしますと六祖が言うのには、たとえ万部誦したといったって、経を得ていない奴にはわからないんだと。法達というそのお弟子は、自分は大変愚鈍である、そして従来ただ文字に任せて読んだけだが、どうにかして、何とかして宗旨を、この本質をですね、明らかにしたいと申しました。そうしますと六祖慧能禪師は、「汝試みに一遍を誦すべし。」お前は試しに、とにかく一遍だけ私の前で誦してみなさい、わしは汝のために解説してあげよう、と。そうして、その法達という方が誦読していて、方便品に到ると、止めなさいと六祖がいわれた。

これは、皆さんのお手許へ差し上げた表の第二品、第三章ですね。これは後に申し上げますが、上根の修行者には理解される法華経の真髓なのです。そして「コノ経ハモトヨリ因縁出世ヲ宗旨トセリ、タトヒ多クノ比喩ヲトクモ、コレヨリ

コユルコトナシ」とこういう事を言つとるわけです。これはどういうことかと申しますと、これから申し上げること、まあ、結論を先に申し上げますが、法華經の、成立的にも原始分と申します、原初形態、その、もっとも出発点と申しますか、本論と申しますか、仏教学的に出発点ともなり、本論ともなる思想を述べておるのが、この方便品なんです。ですから、方便品だけが重要ではもちろんございませんが、宗派や学派の解釈をはなれてみても法華經の本質的な思想です。

六祖はつづけて「何者因縁トイフニ、唯一大事ナリ、唯一大事ハ、即仏知見ナリ。開示悟入ナリ。オノツカラコレ仏之知見ナリ。已ニ知見ヲ具ス。彼レ既ニ是レ仏ナリ。汝イママサニ信ズベシ。仏知見者、只汝カ自心ナリ。」重ねて示す偈として、「心迷へバ法華ニ転ゼラレ、心悟ラバ法華ヲ転ズ」と、即ちいくら何万遍読んでも心が迷っていると法華經に振り廻されちゃうんだと。この「迷フ」という意味は重要な内容をもっていると思われ、釈尊の眞の精神を理解していないと一応申しましょうが、天台の摩訶止観に「無法愛」という十乘觀法の最後にありますように、この仏法だけがすぐれているのだという仏法への愛着すら否定されておるわけで、法華經に説かれる説を信奉することすら迷う内に入るわけです。さらにこれと対句として「心悟レバ、法華を転ズ」と、

法華經を自由自在に行使し理解することを強調するわけです。さらに誦する事久しきも、己れを明かさざるは、義のためには讐家となると述べて、仏教の本質を理解しないで法華經の教義を振りまわすとかえって讐になってしまふんだと。という事を申します。そのお話を道元禪師は引きまして、法華經というものが、ただ釈迦如来だけじゃなくて、十方三世、一切諸仏の「転法華」であり、「法華転」だとそういう事をまず申します。

ここで六祖と法達の話引用したと申しましたが、実は道元禪師の法華經觀を述べたあとに引用されるわけで、もちろん六祖の「法華轉法華」の精神からこの『正法眼蔵』の第十七章に入れられる内容が出てきたわけで、中国禪家も法華經の眞髓をこのように理解したということは、大変興味深いわけであります。いま中国禪を云々することは避けませんが、從來「直指人心・不立文字」を禪家の特色のようにいわれ、中国伝統の学問形態のうちに育まれた義学中心の仏教に對する批判と反省から釈尊の本質にふれようとした禪林では、經論研究は殆んど無視されているように云われますが、「法華轉法華」については、他にもその例証は数多くありますが、実によく經典を熟読理解した上の、実に鋭い經典觀であろうと思ひます。あとで申し上げますように、中国仏教家の法華經解釈のめざしたものが、「心迷えば法華に轉ぜられ、心悟

れば法華を転ず」の一句に凝縮したように思えてなりません。

さて道元禅師の法華経観ですが、『正法眼蔵』の研究者や曹洞の宗風による解釈と多少異なる面もあろうかと存じますが、今日私が述べようとする趣旨の一面からだけ、私なりに理解したことを、ちょっと申し上げておきたいと存じます。まず道元さんは、十方仏土中は法華の唯有なりと申して、十方三世一切諸仏や阿耨多羅三藐三菩提の衆は、転法華・法華転だと申すのであります。すなわち法華経は釈迦仏と十方諸仏の「乃能知是事」の甚深無量の法であり、文殊師利仏として、釈迦牟尼仏として、普賢仏としての「法華転」であり、弥勒に授記する「法華転」であるとするのであります。さらにこの法華は過去七仏のおのに究尽されたもので、西天竺・東震旦に至るもので、三十三祖大鑑に至るも唯一乗法であるとして、青原・南岳の法門にも転ぜられ、嫡仏仏嫡の開示悟入としての「華転」であるとして、高祖曹谿古仏などという表現すら現われるのであります。これは法華経が法の普遍性をもっていることを如実に現わしておるわけでございます。

さらに方便品の「唯仏与仏」「一大事因縁出現於世」「如是相」「仏之知見」「世間相常住」などの用語を駆使して、法華経の精神はあらゆるものに展開していくことを述べているものと考えられます。また先に申した六祖の「心迷へば法華ニ

転ゼラレ」を、そのまま肯定して、劫より劫にいたるも法華なり、昼より夜にいたるも法華なりと、現実のありのままのすがたも法華の展開であるとするわけで、後に申しますように法華経の精神は、あらゆる仏教に及び得るといふ一面を、禅風に解釈したもの以外ならないと思えます。

また「法華転」と「転法華」についても、単に迷と悟に分判しないで、凡そこの諸仏如来の知見波羅蜜は、広大深遠なる法華転であり、授記は自己の開仏知見であって、他の授くるものでないのが「法華転」だとして、これが心迷はば法華に転ぜられることとするのです。しかも心悟れば法華を転ずるということとは、法華がわれらを転ずる力が究尽したとき、かえって自ら転ずる如是力を現成することで、この現成が「転法華」である、いわゆる道元流の解釈をしております、三草二木の譬や鬘珠の喩、さらに地涌の宝塔など、さらに或現仏身而為説法の妙音菩薩品や観音普門品まで法華経の流通分の追加までも転法華と理解しているようです。この点は道元禅師の思想から多少はずれておるようですが、後に申し上げる私の主張と共通しておりますので、一言付け加えておきます。

以上申したことは、あくまでこれからの話の前置きなんです。すが、しかし『法華経』というものが、本当に道元禅師があれほど素晴らしい理解、解釈を示したのはそういうところに



あるんだ、ということですね、ある意味ではそういう下地、受け入れられるものがあつたからこそ、法華経というものが日本文化の中に浸透していったんだとも言えますけれども、私はそういう事よりも、やはり法華経そのものにそういう素地が本質的にあつたんではないか、そういう事を時間的に申し上げられますかどうかわかりませんが、一言申し上げてみたいと思います。

### 法華経の成立

そこで、差し上げた資料、法華経の科文の一覧表の下を見ていただきたいと思ひます。

ここで現行妙法華というのは、現在実際に読まれている『妙法蓮華経』二十八章、それから、『正法華経』というのは、それよりも約百二十年ほど前に訳された竺法護訳の『正法華経』というものなんです。で現在読まれているのは言うまでもなく鳩摩羅什が四〇六年に訳した『妙法蓮華経』でございます。そして、現在二十八品ですけど、羅什が翻訳しました時は十二番目の『提婆達多品』というのが、独立しておらず、前の『見宝塔品』の中に位置しておったというので、羅什の翻訳したのは二十七品であつたわけです。ついでながら、ここに書きませんでした、今よく「浄土三部経」だとかあるいは「護国三部経」と「三」をつけていう例が多

いですが、『法華経』には『無量義経』一卷、『法華経』が八巻の二十八章、二十八品、それから『普賢観経』正式には『観普賢菩薩行法経』という経典がありまして、これを法華三部経と、天台大師の時はそんな事言つてはおりませんが、しかしそういうように位置づけています。そして現在日蓮宗の方では、開経、結経として「法華三部経」として重要視しています。これが「浄土三部経」とどっちが早く云われ始めましたかわかりませんが、共に有名な言葉になっております。

そこで二十八品と『無量義経』一卷、『普賢観経』一卷で、ちょうど三十になりますね。それから八巻とこれを加えるとちょうど十巻。それで比叡山を開かれた最澄さんは、比叡山である時期修行してから、天台大師の御命日に法華十講というものを始められた。法華経の講義でございますね。それが、法華十講とは十回やるわけですね。大体、四日から五日かけてやったのが多いようです。それから各品ごとに講義をし、あるいは読み、それが現在は多分に儀式化、儀礼化しておりますが、当時も儀礼化しており、講義の前後にですね、いろんな仏教法要がついていたわけです。それが法華三十講と呼ばれる。そういうようにですね、国文学など見ますと常に法華十講、法華三十講というのは出てまいりまして、現在でも大きい寺では行っております。

余談はさておきまして、法華経という経典は下のいろんな成立史と書いてあるところでも見られますように、割合とこの古い層から新しい層、後からだんだん附加されたという事がですね、割合わかりやすく、といいますか、悪く言えば非常に下手くその、その作り方だ、という事になるかもしれないけれど、そんなところからも中国仏教においても、法華経というものが一度にできたものではなくして、後から付け加わったものがあるのではないかという疑問が持たれておったわけでありまして。

そのまず第一が、現在の妙法華の二十二に囑累品というものがあります。これはですね、般若經典の中にも、經典の一番最後ではなくして、中途にはいつているものもあるそうですけれど、この法華経の場合は途中にはいつている。この囑累品という性格は、お釈迦さんが経を説いた、そのお釈迦さんの滅後その経をどのように皆は護持してつたらいいか、守つてつたらいいか、それからこのお経によってですね、どのような利益を受けるか、あるいは加護を受けるか、ま、そういうような事を書いてあるのが囑累品の性格でございます。そんな事から羅什訳に二十二番ですが、經典の一番最後にくるのが大体普通でございます。

今の論文で言う序論、本論、結論とありますが、結論とはちよつと性格が違った内容で流通分と申しますが、形の上

から言えば經典の結論であります。ところが『正法華』を見ますと、これが最後の二十七番目へいつています。この『正法華』の方は羅什と同じように、やはり提婆達多品が見宝塔品の中にふくまれていて、提婆達多品として独立しておらないものですから、二十七になるわけです。ところが羅什訳の方が翻訳された年代は、新しいんですね、百数十年。しかしながら現在多くの法華経の成立について研究されている全部の学者が、やはり囑累品が前にあるのがおかしいと感じて『正法華』の原本、梵本が一番後ろへ回したんだと言っております。そんなところから、形から見ますとですね、第二十三品、二十四品、二十五品、二十六品、二十七品、二十八品というものが、いろいろないきさつがあつて、付け加つたんだというのが大体现在の定説でございます。

実際において、この法華経の内容を見てみますとですね、法華経二十八品を一つの脈絡ある形に付け加えていなければいけないので、多分に前の品、前の思想、前の表現、前の舞台——法華経は非常にドラマチックな文学作品でございますから、そういうものを合わせるために——それに合うような表現がつけ加えられておりますけれど、二十三品以後はですね、必ずしも法華経にどうしても必然的になくはならないという内容じゃないんです。もちろん、その中に法華経がすぐれた経だとか、法華経を読誦するとこれこれの功德が

あるとか、法華経を護持しなさいという事は述べられていますが、法華経自体の思想から言えば、傍系と言いますか、いろんな信仰が附加されてきたといえるのです。

例えば二十三品の『薬王菩薩品』、薬王菩薩本地品というのが正式な名前ですが、要するに薬王菩薩の前世の苦行が語られています。日月浄明得仏と、法華経のために、薬王菩薩が自分の肘を焼いて、焼身供養あるいは指灯供養したということです。そして自分自身の最も大事なものの、それは自分自身の肉体ですよ、これは法隆寺の玉虫厨子に、飢虎のために身を捧げたジャータカ物語、釈尊の前世の物語などありますけれど、そういう薬王菩薩の信仰です。

それから二十四品の『妙音菩薩品』というのは、妙音菩薩が十六種の三昧を得て衆生のために梵王とか帝釈天・自在天・居士・祭官・バラモン・僧・尼・信士・信女等三十四種の種々に身を現じて法華経を説くことを述べますが、次の観音普門品ですね、三十三身示現とほとんど同じですが、その色身三昧という三昧を得る事ができた、とそんな信仰です。

それから『観世音菩薩普門品』、これは一般に有名な、ですね。これは三十三身説で、三十三に身を変えたという。これは前の『妙音菩薩品』と大体同様です。余談ですが、同じように数えていくと、三十四身なんですよ。ところが現在

中国へ行きますとやはり、観音さんは三十四に示現した、身を変えたというあれが、私の経験した寺では皆、三十四身のようですね。ところがどうも天台大師が初めて三十三と言いだめたらしいんで、数からいってどっちがどういうものか、これまだ研究してごさいませんが、似たような信仰でございませぬ。念彼観音力によって、火難・水難・刀杖難等の七難から免れると、いう信仰です。

それからの次の『陀羅尼品』は、要するに陀羅尼というのは經典以外にも独立してインドでも随分、いろんな厄災から逃れたり、あるいは法を得るためにされたものです。そういう陀羅尼の信仰というものが『法華経』に結びついてくる。

それから『妙莊嚴王本地品』。妙莊嚴王の前世の話で王の子供がですね。これは第七化城喩品にも出ますが、釈尊の出家前の子供の羅睺羅と似たような設定になりますけれど、その二人の子供がですね出家して、外道の信仰していた父の王様を仏教の信仰に変えさせた、というそんなふうな信仰。

それから最後の『普賢菩薩勸発品』は普賢信仰です。現在でも普賢信仰というのは、普賢菩薩という表現は、最も抽象的な表現で、もう菩薩の代表的抽象的表現だと言われておりますが、これは華嚴経にでてくる信仰で、華嚴だけには限りませぬけれど、『華嚴経』に出てくるのも普賢信仰が大きく

出てきます。

このように二十三品以下は、曹洞宗の方々には細かく説明しすぎたようかもしれないけれども、要するにこの五品がなぐとも『法華経』の内容、思想内容にはちっとも変りはない。もっと面白い事にはですね、中国で『妙法蓮華経広量天地品第二十九』という偽経があり、二品につづけたつもりでしょう。

さらに、これも敦煌出土のものですが、『妙法蓮華経馬鳴菩薩品第三十』というのもできてくる。つまり法華経ではいろんな信仰がどんどん、付け加えられたということです。

話の途中で申しわけありませんが、結論を先に申し上げるならば、法華経の精神、あるいは法華経が目指しておるものは、先程道元禅師の「法華転法華」の所にもちなりと出るように、釈迦仏だとか、あるいは文殊仏だとか、十方諸仏だとか、あらゆる諸仏によって説かれた、あらゆる諸仏の共通の、あるいはあらゆる諸仏の証明された内容が根底にあるんだ、という事です。という事は、その根底さえはずさなければ、その根底に基づくならば、あらゆる信仰が『法華経』に理論的には加わってもかまわないということなんです。法華経の成立史的にも二十二の嘱累品以後が加わっているんです。また中国においても二十九品、あるいは三十品というようなものも加わったという例もございます。こういうところからし

まして、既に中国で『嘱累品』が中途にあるのは疑問視されていますが、このような点から推し進めて法華経の原型を探り出してみたいというのが、本日の講演のねらいでもあります。

法華経科・成立一覧表をみて下さい。一番下の欄で第一類、第二类、第三類と一応法華経の成立を研究された先生方の共通した説をまとめてみました。多少の表現や区切や成立年代の違いはありますけれど大体このようにまとめられます。そして、本田義英先生などは、第一類・第二类・第三類の下にA・B・C・D・E・F・Gと抜き出したのが後世の附加分で、それ以外のところが法華経の原始分だとされています。そのうち最も古く形成されたのが第一類、第二类のうち、下に抜き出したもの以外のものと申しておられます。それから嘱累品の以後を、その後につけ加えられたものだとしております。さらに他の先生方は本田先生が原始分と申しました中にも、第一類、第二类の分類をされる方が相当おられます。

その代表的な方が布施浩岳先生の説と思うわけでありますが、プリントにもありますように、中村元先生や田村芳朗先生なども、区分の仕方や成立年代については多少異なっておりますが、大体似たような区切りをしていますので、一応私もそれに順じたわけでございます。

そうしてみますと、第一類の中に「原始法華經」という名稱を一応書いたわけですが、これは偈頌が先か、長行が先か、一般の言葉でいいますと散文体と詩偈とどっちが先かは一概には言えないのですけれど、ま大体において詩偈の方が先に成立したといわれております。結果から言えば、長行を詩にしたのを重頌、内容を重ねて頌にしたことを申しますが、そういうものなぞが多い点からして大体やはり偈頌の方が先だったんであるうといわれております。布施先生はまず西暦前百年頃偈頌が成立し、その後で、西暦前五十年頃、長行、散文体が成立したんだ、と説いております。それからその後にいわれる第二期として、法師品から囑累品と序品が出他たとおっしゃっております。大体そういう事で、第一類、第二類という事から第一期、第二期、第三期といったような事が大体现在類推されております。

### 法華經の構成

それで内容から見ましても、やはり方便品、第二の方便品から第九の授学無学人記品、人記品と省略してある場合もあります。そこまでは、どうも成立史的にも最も古いであろうと考えられ、そしてこの八品、八章は前後の脈絡からも統一されておるといのが在来の研究の結果であります。たとえば申しますならば、第十の法師品以後書写の功德が述べられ

るようになる。天台教学では五種法師と申しまして、經典を受持・読・誦・書写・解説、すなわち經を体に持ち、それから読む、それから誦、暗唱する、それから書写する、解説、人々に解釈して教えるの五種が重要だということです。書写が法師品以後に初めて出てくるということは、經典は本来暗誦して口から口へと伝えられてきたもので、經典を書写するようになったのは紀元前後と推定されているからです。その他いろんな理由が挙げられますが、法華經成立史の話ではないので略します。そして第一期に第十八の随喜功德品の偈頌も含めるんだとの説もありますが、これはちょっと例外といたしまして、とにかく最も原始的な古い層がどうも第二方便品から第九人記品までと考えられるわけです。それで序品は、最初にあります。内容からみても八品が出来上った後、すなわち第二類ごろに加えられたものとみられています。

あらゆる我々の論文でもですね。本論を書いてしまつてから最後に序をつけるというのが多くの人のやる事です。現在の法華經成立史の研究は、經典の内容の矛盾や出てくる仏・菩薩や釈尊の御弟子名などから、さらにサンسكريットばかりでなく、周辺のギリシアとの交流などからもなされているのです。

たとえば第四の信解品にはお金の貸し借りの記述が出てくるんですね。そんなところから中村先生などは紀元前四十年

頃に成立したんじゃないかというような事を申し上げておりますが、それはそれとして、いろんな面から多少の例外や入れ違いはありますが、大体この第二の方便品から第九の人記品までが最も古い形、言うならば原始法華経と申しても良いかと思えます。

ところが、プリントの上を書いてあるのが天台大師の科文でございます。天台大師は二教六段などと後後世呼んでいますが、法華経の前半を「迹門」と二つに分けております。さらに一教三段、全体をですね。第二から第二十一までを正宗分と名づける考え方もありますが、本門、迹門それぞれに、序分、正宗分、流通分と分ける考え方が非常に強いようでございます。

これはまあ、皆さん経典を読まれたり、読まれるどころか本当にいろんな面から研究なさっている先生方も多いわけでございますが、大体、こうやって序分、正宗分、流通分と分けた場合に、やはり思想的に、あるいは理論的に、あるいは経の中心思想として出していく場合には、正宗分が大体その中心であるという事は多くの經典に大体共通する事でございます。そして天台大師はやはりそのようにですね、迹門を第二品から第九品までの間を正宗分としている。そしてその中で、方便品の一等最初の、ほんのわずか、大蔵経の分量にし

て確か一段位だったと思いますが、「略して三を開いて一を頭わす」（略開三頭一）、三というのは三乗、一というのは一仏乗ということ、これは法華経に常に出てくる重要な、タムになっております。それから、それであごく簡単に三乗を開いて一乗を頭わすという事を述べて、それからあと後半に広く詳しく、詳説するわけですね。

この正宗分の中を法説周・譬説周・因縁周に分けております。周は一巡りという事で、上根の人間には法を説いて理解させることで、第二番目は中根の人間のために譬ばなしによって理解させる。すなわち成績の良いのは法説周だけでわかるであろうが、しかし中位の成績の者には喩え話によって、それをわからせてやろう。それから最も程度の良くない人達には、お互いの人間関係を述べてわからせる。因縁というのは、お互いの人間関係を述べてわからせる。因縁というのは、現在我々が寺の縁起だとか、色々な因縁があったとか、使っているのと似たような面と考えてよろしいかと存じます。本日の皆さんと私とが色々な因縁で、こうやって講演を頼まれたわけです。本縁部というのが大蔵経にあります。本縁部の場合は釈迦如来が前世の数々の善行をしたからお悟りになられ仏陀となられたという釈尊前世の物語りです。法華経では必ずしも釈迦如来だけじゃなくて、舍利弗、目連も、あるいは千二百五十人のお弟子たち全部含めた因縁の物語によって説くわけです。お前たちは昔、前世において

私の説く法華経の座で法を聞いたんだよ、その因縁が熟してまた聞くようになるんだ、ということでございます。この三つのパターンによって第九品までができておるわけです。ところが先程申したように現在の学者の多くの方々がこの九品までが法華経の原始分としていることと不思議にも一致するわけです。

そこでちょっとプリント(表2)の一番上の方を見ていただきたいんです。現在中国に残っておる法華経の註釈書の最も古いものが、羅什のお弟子の道生の『法華義疏』ですね。ところがそれを見ますと、第一授記・第二授記・第三授記と大体天台大師と似たような、大体同じ区切りをしておるわけです。聖徳太子の『法華義疏』のサンプルとなった光宅寺法雲の『法華義記』も法説・譬説・因縁説としており、各品の配当は同様であります。

もう一度天台大師の科文をみていただきたいのですが、この法説周の中に正説・領解・述成・授記と分科されました、譬説周も同様、因縁周は領解と述成が省略されていますが同様の形で説かれています。まず正しくお釈迦さんが法を説く。するとお弟子さん達、聞いていた人達が理解して作仏できるときのだという喜びを述べる。これを領解と表現します。すると次が述成で、如来はこれから授記するにあたっての意義を述べて、未来成仏の保証を与えるわけです。あるいは私は

こう理解いたしましたよとお釈迦さんにお答えする。そしてお釈迦さんが、そこまで理解したんなら、お前は将来成仏すると授記するわけで、最初に授記された舍利弗は未来世において華光如来という仏になり、その仏国土名は離苦国というのだよと具体的に記刺を授けるわけであります。その四つの形態が天台大師の場合にはちゃんと形が出てきておるわけです。

それと同じように道生の場合には、第一説・第一授記(方便品・譬喩品前段)この間の領解・述成という科文はございませんがこれはおそらく第一説中にあるいは第一授記の方に扱っておるんだと思います。そして道生は、この天台で言っている法説周にあたる部分を、第一回目の説と第一回目の授記としています。それから次に天台の科文で言いますと、信解品にあたる正説から授記品に至る授記までを、第二説、第二授記と相応します。それから第七化城喩品から第九の人記品に至るものを第三説、第三授記と、このようにしておるわけです。もちろん道生の書も天台大師は見ておられるはずで、その影響もあつたとも考えられます。

それからその次が梁の三大法師の一人といわれる光宅寺法雲。その科文を見ますと、ちょっと表現は違っておりますが、それぞれのところではですね、天台大師と同様な表現で「法説して上品を化す」と。次は譬説。喩えて説いて中根を

化す、と。第三には因縁説によつて下根を教化す、と。そしてその中もまた内容はちよつと違つていますが、しかし法説・示同領解・述成領解相・授記と、天台大師の科文と表現も全く類同でございます。これは光宅法雲の『法華義記』の影響が非常にあつたという点と、天台大師は光宅法雲の説を名は同じだけれど義は異ると批判しておりますが、やはり同様な法華経の構成を理解していたわけであらうと思ひます。

このようにこの科文についてもですね、天台大師は批判をしながらも道生と光宅と天台はほとんど同じでございます。

さらにこれは天台大師以後ですが、中国における法華経解釈のもう一つの重要注疏として、法相宗の慈恩大師の『法華玄賛』があります。これには天台と同じように一教三段、二教六段という二つのたて方を立てまして、詳しくは申し上げる時間がありませんが、現在問題にしておりますもつとも原始法華分にあたる科文については、第二方便品から第九人記品までを正宗分としまして、それから細かい点となるといろいろございますけれども、中国の現存する法華経の解釈の代表的学僧たちが、大体法華経を同じようなおさえ方をしておることがわかります。ということとは、やはり法華経の内容、説相、説かれた形というものが、やはり誰が見ても同じような構成にならざるを得ないんだといえようと思ひます。もちろんこれは梵本と漢訳の違いはありますけれども、現在残存す

る梵本の研究から見ましても大体このような形になる。そうしますと、法華経の成立史的にも古い部分が、また中国の仏教研究者にとりまして、法華経の中心的思想としての科文を与えておる。

それで、この本門、迹門、時間がありませんので少しはしよりますが、本門、迹門という事について一言申さないといけないんですが、日蓮宗の方では非常に本門というものを重視いたします。迹門はもう抜けがら形骸であるというようない事を申しまして、本門を重視しますけれど、これは一応、第十六如来寿量品を中心とするところのもので、今まで法を説いておられた釈迦如来は実は五百億塵点劫、天文学的数字の昔、既に成仏しておつて、常に法華経を説いてきた。だから久遠の釈迦と申しまして、歴史的釈尊が仏法の理を人格化した形において永遠の救済主となるわけで、この本門の久遠釈迦の出現によつて歴史的釈尊の法華を説く場面は久遠の釈迦が過去に幾たびか法華経を説かれた一部分、仮りの姿となるわけで、本門が本来的のものであるというわけです。天台大師は本迹不二と申しまして、いずれも互いに相補つて久遠の釈迦の宗教的生命と、その理論的意義づけは別々に考えられないとするわけです。

しかし我々学んでいく者にとつて、あるいは法を聞く者にとつてはですね、迹門の理論的体系からいつて初めて久遠の



釈迦といふところへたどりつくわけで、そういう意味におきまして我々学ぶ側からとって見ますと、やはり迹門の思想が一番重要なものではないか、とこう考えるわけです。重要というのは迹門と本門のどっちが勝れているというのではなくて、学ぶ側からとってみれば、本門の理論的、思想的問題を解いていかれるのが一番はやり易いと、こういう意味で重要と申したわけです。ですからこの三周説法と申すのも、法説周、譬説周、因縁周という事に三段に分けて、これでもか、これでもかといって、同じ思想を何回も何回も言っておるのが法華經の特色で、文学作品としても、譬話や宗教的人間関係の中から法華經の精神を理解してもらおうというのであります。

### 法華經のめざすもの

以上舌足らずの面もありましたが、法華經の構成を、その成立史の研究と併わせて申し上げてまいりまして、中国の主要な法華經注釈者の考え方と、また梵本をふまえての現在の法華經成立史を論じた大体の結論との両方からみまして、第二方便品から第九人記品までが、法華經の原始分と考えられることを申し上げました。

さらに中国仏教学者の代表的法華經研究者四名、道生・光宅・天台・慈恩の注疏の共通する科文から、この原始分も三

つの要素から成り立っていることを申したわけですが、天台流に申しますと、法説・譬説・因縁のいわゆる三周説法の三分類です。そして法説周で理解できない弟には、譬説周で説明し、さらにそれでも理解できない機根のものには因縁周によって理解させるといふ構成からみると、法説周が法華經の中心思想とみてよいわけで、各周の中の科文も正説・領解・述成・授記とそれぞれ共通しているところからみても、お解りかと存じます。

ここで四つの科文の漢字を見ただけでも、正説が法華經の意図する主張・正説・主旨とみてよからうと思ひます。これは道生の第一説・第一授記の表現をみてもより明瞭であろうかと思ひますが、如何でしょうか。このようにみても方便品の正説が、法華經の中心思想というか、法華經の説かれた意図と申して差しつかえなからうかと思ひます。事実、道生が第二説・第三説と科文で示しておりますように、天台でいう譬説・因縁周の正説では方便品の主張と大体同様なことが述べられております。

そこで方便品では、どのようなことを申しておるかというのと、「すべての人々に仏知見を開き示し悟らせ入らせるため（開示悟人）に出現したもので、これを諸仏は唯だ一大事因縁をもって、この世に出現したのだ」と説きはじめます。これが「一大事因縁」とか「出世の本懐」といふ有名な言葉で

す。

それじゃ、その説かれた法華経の内容はどういうことなのか。経では種々の表現で説かれておりますが、一言でいえば一仏乗ということ、あらゆる一切のものに通じ、あらゆる諸仏も説かれた普遍的な仏法が、法華経で説かれる仏教で、具体的には声聞とか縁覚といわれる二乗も作仏できるんだということを言うわけであります。

先程申したように、大乘仏教では、声聞、縁覚という修行者は成仏できないのだというのが通説であります。声聞というのは今の考えでいくとイデオロギーにかたまった、一つの元思想家で、自分の修行しているこの法だけが一番すぐれていると、自らの立場に固執しているものといえましょう。仏教の伝統的解釈からいいますと、自らの悟りばかりに専心して他の救済などに目もくれない小乗の阿羅漢になることだけを目的とした釈尊の御弟子たちといわれています。しかし決して貶されるものでなく、釈尊の説かれた修行を一生懸命にやることで、これは大変立派な修行者ですよ。そして小乗の教えといわれますが、学問的には上座仏教の修行者で、とてもあのような偉大な仏陀になれるなどは考えもしない。そういうのが声聞です。

それから辟支仏、縁覚あるいは独覚と訳しますけれど、これは今まで私どうしても縁覚、声聞と二つの系統を立てねば

ならないのか疑問で仕方がなかったわけですが、解釈によりますと、声聞というのはお釈迦さんに法を耳で聞き、もっともお釈迦さんが亡くなった後だとすれば、お釈迦さんの説かれた法をお経などで聞いたり読んだりして、そして悟りを得ると一般的に考えられております。独覚というのは、他から法を聞くことなく一人で修行して悟るんだといわれています。何かその両者がどういう関係になるのか割り切れなかったわけですが、最近の研究で阿含經典のなかに独覚のみを主題とした『吞仙経』という經典があるんだそうですね。仙呑という山があって五百の仙人を呑んだという伝説があります。部派仏教の内にも部行と麟角喩の独覚をあげておるそうです。法華経の譬喩品には辟支仏のことを「自然慧を求め独善寂をねがい深く諸法の因縁を知る」と述べています。私の推定では、仏教徒でない独修、独行の思想家あるいは修行者たちではなかったろうかと思えます。

伝説によりますと、摩訶迦葉だとか、釈迦の十大弟子といわれる中には、五百人の教団を率いて教団ごと仏教に入信したという伝説もありますようにですね、一人で自分でこつこつと仏教の教えなんか聞かないで、覚者となったような、そういう人達が現実にあつて、そういう人達が仏教徒の中へはいつてきたり、あるいは仏教徒の周辺にいたんじゃないかと、そんなふうに解釈したら声聞・独覚、釈迦のお弟子さん

と独住の修行者という二種類の修行者ということですから、  
するわけです。要するにですね、いずれも自分の得たものを  
これで完成したもの、それが最もすぐれたものと固執する、  
言うならば自己の学問に、あるいは自己の境地に、あるいは  
自己の悟りに安住してしまっておるもの、そういうものが二  
乗だと考えてよいわけです。

そういうところから大乘仏教では、声聞・縁覚は成仏でき  
ないんだと峻別し、単に排斥するばかりじゃなくて、輕蔑  
さえしてきたわけですね。ところが法華經の一番大きな特色  
は、そういう声聞、縁覚すらも法華經の教えを聞くことにお  
いて、成仏ができるんだ、というのが一番の特色なんです。

これは中国仏教の初期において、羅什と廬山慧遠の交換文書  
が十八通残っております、今『大乘大義章』と名づけて編  
集されておりますが、その中で羅什は慧遠に法華經は深々秘  
密の經典だから、声聞・縁覚も成仏すると説いておるんだと  
声聞・縁覚の作仏を特別のことに把えています。このことは  
有名な『大智度論』でも、法華經を二十数回引いております  
が、その主な引用を声聞作仏に関するところ、法華經の特色は  
声聞授記である。仏弟子の成仏できないものが将来必ず成仏  
するんだ、とそれが「法華經」の特色なんだと、いうわけ  
です。

そしてこの方便品で説かれてたのは「唯有一仏乘無二亦無

三」と有名な言葉で表現されているように、声聞の教え、辟  
支仏の教えと種々あるが、二乗作仏という論拠から、ただ一  
仏乗だけあって、それを説くのが法華經であるというのであ  
ります。方便品では最初に、諸仏の説として二乗、三乗は方  
便で一仏乗だけが真実であると説くのです。さらに過去仏に  
おいても、この一仏乗ということを説いた。今まで説いた經  
典、仏教は皆これを説くための方便なんだ、あるいは方便の  
ために説いたんだと述べるわけです。そして最後に皆の機が  
熟したからこの一仏乗、このあらゆるものに共通した、あら  
ゆるものを含めた仏教を説いた。しかも方便品の説相により  
ますと、ただ一仏乗だけで、二乗も三乗もないんだ。諸法実  
相という事も仏と仏とのみ知っている法だ、という事も説き  
ますけれど、それは一仏事に撰せられるわけです。それから  
過去の諸仏もこれを説いたんだ、現在十方の諸仏も同じこと  
を説いたんだと、同じことと言わないで一仏乗の表現をそれ  
ぞれに述べるわけです。それから現在も釈迦である自分も、  
この法を説いているんだと五回繰り返しているわけです。五  
種類の仏を挙げていますので、天台の教学では五仏章と言っ  
ております。そしてこの法華經のぎりぎりの、唯一仏乗だよ  
という説いたそれは、あらゆる諸仏も説かれ、そしてそれを  
説いているんだ、ということを繰り返すわけで、あらゆる諸  
仏の説ということで、これは法の普遍性を意味すると思いま

す。しかも先ほど申した法説周、譬説周、因縁周によって、それを喩えをもって、あるいは因縁をもって同じ主旨を種々の様式で、いろいろな表現で繰りかえすのが、原始法華経の説相であり構成であるわけです。

そしてその説かれた内容は、このようにして守らなければいけない。このようにして修行しなけりゃいかん、というのが第十品以後にいろいろ述べられるわけで経典の特色である流通分となるわけです。またこのあらゆる諸仏が同じように歩んだ道ということは、一仏乗はあらゆる仏が説いたものであるという法の普遍性を示しているわけであるわけです。方便品でただ一仏乗だけが仏法なんだと説いた後で、「舍利弗よ、もし我が弟子自ら阿羅漢、辟支仏なりと思わん者、諸仏如来のただ菩薩を教化し給う事を知らずんば、これ仏弟子にあらず、阿羅漢にあらず、辟支仏にあらず」ところ申しておるんですね。これはすでに阿羅漢を得たと確信し、究竟の涅槃であると思って、本当の果を志求しないものは増上慢であるという主張であります。裏をかえして申しますと、如来の眞実義を理解したものが、あらゆる仏教は一仏教であることを体得したものは、眞の阿羅漢であり辟支仏であり、仏弟であるという意味となりまして、その意味で声聞や縁覚の修行を認めるといふことになりかと思ひます。私は法華経の一番原始分における正説である方便品に説かれる主張は、法の

平等性、普遍性、それからこれは後で第十六如来寿量品のところにくくと、仏の普遍性、永遠性という面をも含めまして、今まで説かれた法、行なってきたあらゆる仏道修行、仏道の学問は、全部それらを否定して、新たに別のところに法華経の精神があるのでなくして、在来の行なつた、そのまが百八十度の転換によって、そのまま仏道修行なり、仏法が生きてくる、とこういうことを申し上げたいわけで、これが本日の講演の結論でもあるわけです。

これは私は読み方が未熟で、あるいは道元禪師を冒瀆することを恐れるんですが、どうも道元さんの「法華転法華」を読んでいて、それを非常に強く感じたわけです。今後これについてますます勉強させていただきたいと思ひますけれど、要するに法華経には、法華最第一だとか、最も勝れた経だとかいっばい書いてありますけれど、また法華経を護持するためには、あるいは誹謗する者はどうするんだとか、種々の面から菩薩行が述べられておりますが、その一番中心になつておるところのものは、仏法の普遍性だと思ひます。ある意味でいえば、三階教の普法というものにも共通する法であると感じられるのです。そうしてだからこそ、あらゆる仏教というものの存在意義を認めていく。この方が種々の菩薩行を説くより法華経の重要な思想だったろうと思ひます。

ところが現在は、付け加えられた品ものばかり、とは言い

ませんけれどね、法師品以下のですね、菩薩の法華經を護持していくにはどうしたら良いか、法華經を布教するにはどういう修行をしたら良いか、というような個々のいろんな信仰の一部分を取り出してそれを一生懸命、これ宗教的行為として非常に重要なことですね、どうもそっちだけに一元的に走ってしまうのが、法華經だと、どうも在来捉えられ過ぎてはいないだろうか。これについては、もう少し説明しなければなりませんけれど、長くなりますので結論だけ申し上げますが、あらゆるものの存在を存在意義があるとして認めていく根本精神があつて、これを種々の形でどのように何回にもわたっていろんな諸信仰が附加されてくる。ですから私は、理論的には、建前としては、日本においても法華經第五十品、第六十品できても、ちっとも中心の思想から言えばおかしくないのではないかと、このように考えたわけでございます。

どうも時間の配分が悪くて充分に皆さまの納得がいったかどうか、あるいはまた、道元禪師の読み方も足りなかったかと思ひますけれど、私は法華經ばかりじゃなくて、般若經典にもあらゆる大乘經典には、あらゆる法のユニバーサルというか、法の普遍性そういうものがあると思ひます。そういうものを今後見出していくということが、仏教というものが平和共存の大きい精神的依り拠として、人類に大きな役割を果たすのではないかと。そこまで私はとても自分ではでき

るとは思つていませんけれど、しかしそういう大きい希望は仏教を学ぶことによつてより如実に出てきはしないかと、そのように考へておるのでございます。果たしてこれが法華經の本當の精神の受け取り方であつたかどうか、自分でも自信を持つて言えない点も無きにしもあらずですが、私が数十年來法華經の勉強をしてきました大體の結論が、今まで述べてきたように相成つたということとを述べさせていただきます。本日のお話を終わらせていただきます。なお、これにつきましては大變後になつて申し上げて失礼なんです、昨年大正大学出版部で出された『仏教と人間生活』の中で「法華經のめざすもの」という題でお話したことの一部でございますので、思想的なり、教理的にもう少し詳しく知りたい方はそれをお読み願えれば幸いと思ひます。

どうも大變、御静聴ありがとうございました。

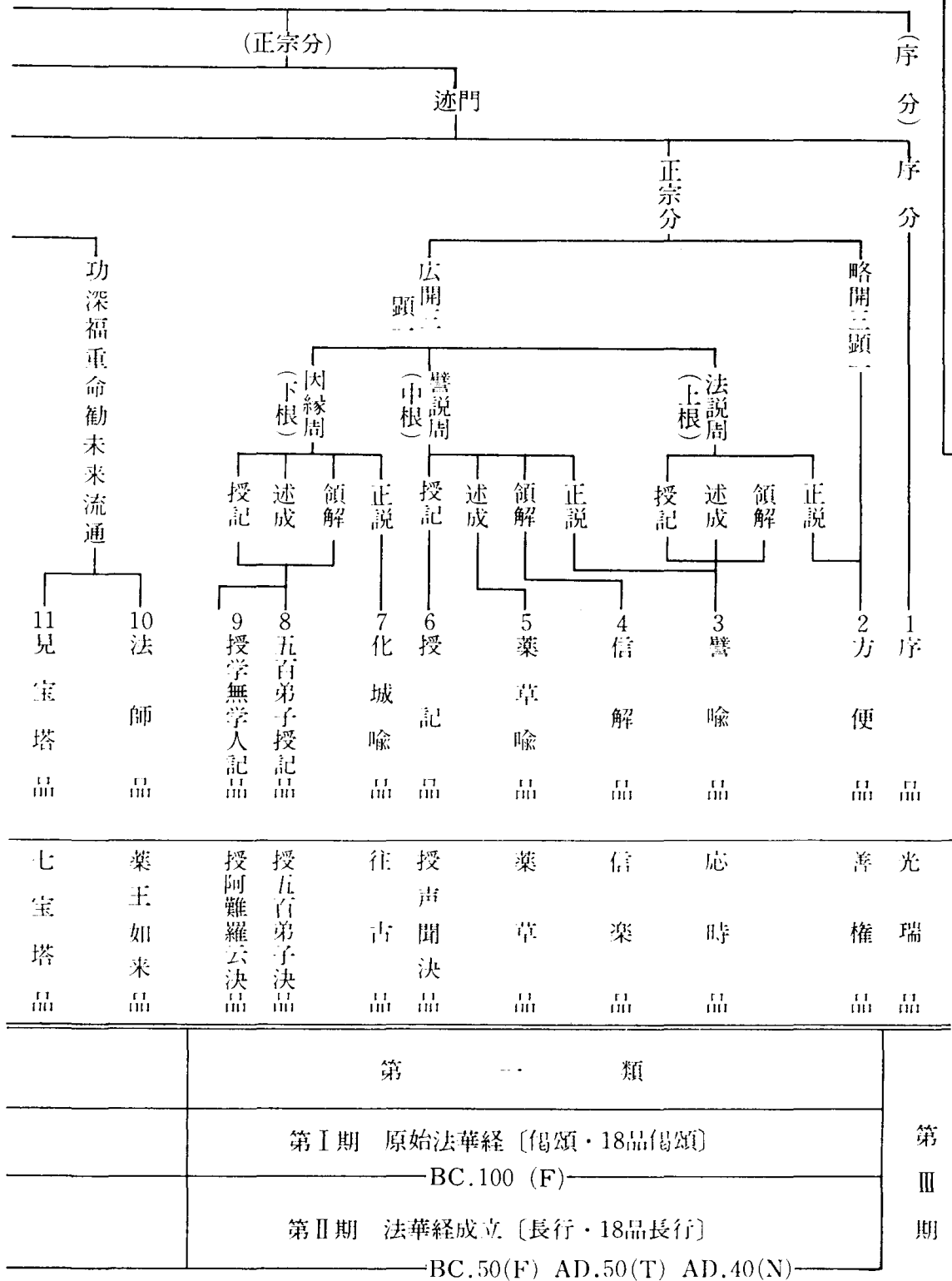
法華經科・成立一覽

(表1)

(現行妙法華)

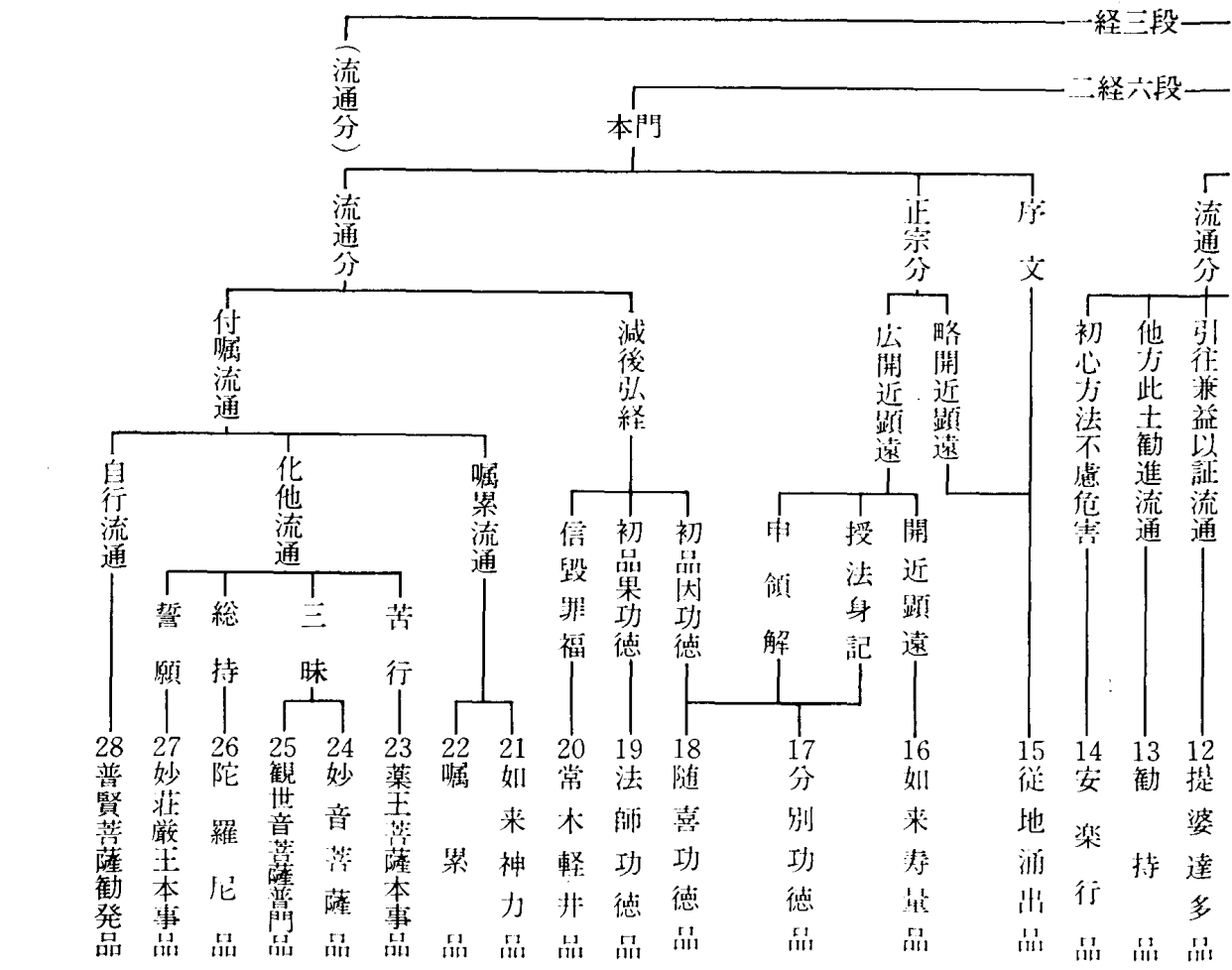
(正法華)

(成立史)



第三期

- (F) 布施浩岳說
- (N) 中村元說
- (T) 田村芳朗說
- (本) 田說
- A 譬喻品後半偈
- C 藥草品後半 (正・添・梵・西)
- D 五百弟子品初半 (正)
- D 法師品初半 (正)



27 嘱累品	樂普賢品	淨復淨王品	總持品	光直普門品	妙吼菩薩品	21 藥王菩薩品	20 如來神足行品	19 常被輕慢品	18 欽法師品	17 勸助品	16 御福事品	15 如來現壽品	14 菩薩從地涌出品	13 安樂行品	勸說品	(七宝塔品中)
--------	------	-------	-----	-------	-------	----------	-----------	----------	---------	--------	---------	----------	------------	---------	-----	---------

第三類	第 IV 期 AD.150 (F)	第 I 期	第 II 期 AD.100 (F) AD.220 (N)
B=第 III 期		長行(第 III 期)	薩曇分陀利經

長行 F 但 G 阿彌陀偈 (梵·西)

E (正添梵·西·現)

原始法華経の諸師科分 (表2)

